



埼玉県指定史跡

將軍塚古墳

都幾川が形成した広い沖積地に張り出す松山台地先端部南縁に立地している。現存墳丘長 115m の大型前方後円墳である。
(埼玉県東松山市下野本 612・613)

将軍塚古墳の調査

将軍塚古墳は、発掘調査が行われていません。デジタル三次元測量と地中レーダー探査によって得られたデータから、

- ①後円部3段、前方部2段の立体構造をもつ
- ②前方部は細長く、あまり開かない
- ③定型的な周溝が存在しない
- ④後円部墳頂に竪穴系の埋葬施設を持つ

などのことが分かりました。これらは、古墳時代前期（注）の古墳の特徴で、将軍塚古墳は前期に築造されたと考えられます。古墳時代前期の古墳であれば、北武蔵で最大の古墳となります。

また、独立丘陵などを利用した形跡はなく、墳丘土はすべて盛土です。これだけの土量を確保するのは相当な人力が必要で、かなりの大事業であったことが分かります。

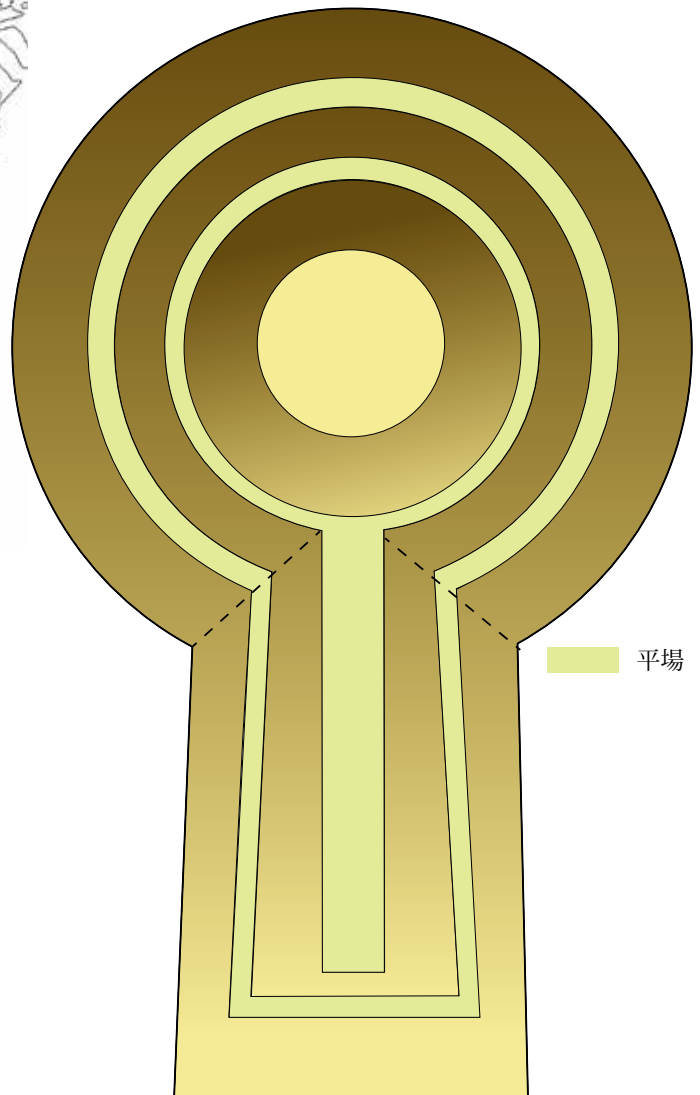
なお、この古墳には埴輪は樹立されていません。

（注：古墳時代はおおよそ3世紀から7世紀ごろにかけての古墳がつくられた時代。3世紀中ごろから4世紀を前期、4世紀末ごろから5世紀を中期、6世紀から7世紀を後期、7世紀末を終末期と分けて考える）

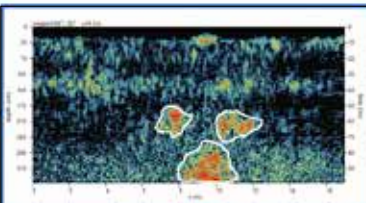
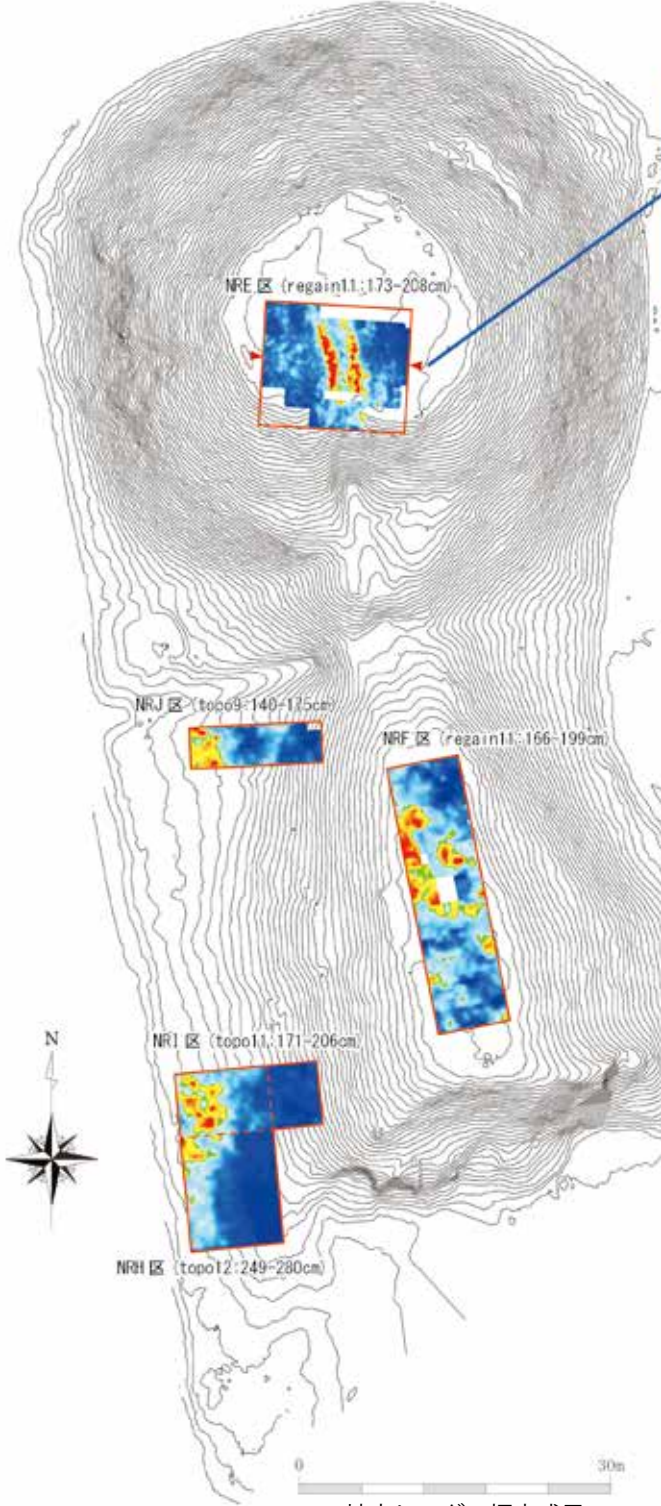


墳丘測量図（10cm等高線）

2段重ねられた前方後円墳の後円部の上にもう一つの大きな円丘が置かれているイメージです。実際は、利仁神社の参道や、前方部前面から東側面が宅地造成等で、後円部墳裾が生活道路や車道などで、改変されています。立体構造の復元を踏まえ、大和の前期大型前方後円墳と比較すると、メスリ山古墳（奈良県桜井市）の設計原理と共通性が認められます。



墳丘構造のイメージ



横断面図

地中レーダー探査で、後円部墳頂の中央部やや南側の地表面下 156 ~ 260cm で、南北長約 8m、東西幅約 3.5m の反応が検出されました。中央が凹んだ断面 U 字形の竪穴系の埋葬施設が想定できます。川原石で礫床を構築し、木棺を安置、上部を粘土で覆ったものと考えられます。底面には鞍部に向かう反応も確認されることから、排水施設が存在する可能性もあります。

埋葬施設はヤマト王権からの影響が少なく、地域性があります。東日本の前期古墳には竪穴式石室が分布せず、基本的には粘土槨ないしは木棺直葬です。将軍塚古墳の礫槨が、東日本で数基しか確認されていない礫槨のどこに系譜を持つか、これからの研究課題です。

将軍塚古墳の二次利用

後円部の墳頂には、経塚が造られていました。経塚とは、経典を写経し、これを土中に埋納したもので、浄土思想が普及した平安時代から行われるようになったものです。造る場所としては、霊地や聖地とされる山頂や神社境内が選ばれました。明治 34 年 3 月、利仁神社の春の祭前、境内の凸凹を整地する際に経筒等が見つかったという記録を根岸武香(注)が残しています。報告によると、後円部墳頂に半円を描くように 6 基の経塚が造られており、最も西寄りのものには、常滑甕の中に銅版製経筒が納められ、その横のものには建久 7 年銘の鋳銅経筒、さらに東隣には瓦質製経筒が埋納されていたようです。この古墳が、後世の鎌倉時代に二次利用されていたことが分かります。出土した銅製経筒 2、瓦質経筒 4、常滑甕 1、古鏡 4、青白磁号子 4 は、東京国立博物館に収蔵されています。

(注) 根岸武香：大里郡青山村(現・熊谷市)生まれの貴族院議員、県会議長、郷土史家。

将軍塚古墳の名称の由来

後円部墳頂に藤原利仁を祀った利仁神社が鎮座しています。藤原利仁は、平安時代の貴族であり武将です。坂東の国司を歴任し、915 年には鎮守府将軍(奈良～平安時代にかけて陸奥国に置かれた郡政府の長官)となりました。平安時代の代表的な武将として伝説化され、多くの説話が残されている人物です。この利仁将軍が祀られていることから、将軍塚古墳と呼ばれるようになったと思われます。

将軍塚古墳のこれまでとこれから

昭和 35(1960)年、当時、墳丘長が県内第 2 位(注)の規模を持つ古墳であったため史跡として埼玉県より指定される。ただし、発掘調査などが行われていなかったため、築造時期が不明のままであった。その後も発掘調査が行われないうまま、それぞれの研究者によって前期説・中期説・後期説が唱えられていく。

古墳の南方 1.3km、都幾川が形成した沖積地に所在する反町遺跡は、平成 17(2005)年から発掘調査が開始され、その調査や整理が進むにつれ、古墳時代前期においては県下最大の集落遺跡で、治水や農業土木、手工業等、様々な技術を保有した人々の集落・交流拠点であることが判明した。さらにその南方、高坂台地上の高坂古墳群では、平成 23 年埼玉県で初めて古墳時代前期の遺物である三角縁神獣鏡が発見された。いずれも都幾川を隔てて将軍塚古墳の対面に位置する。また、古墳の北方 1.4kmの松山台地上には、古墳時代前期の五領式土器の標式遺跡として著名な五領遺跡が所在している。昭和 29(1954)年より数次に渡り調査が行われており、首長居館の周囲に形成された集落と考えられている。

このように、将軍塚古墳を取り巻く状況から、築造年代を前期とする説が近年有力視されてきていた。

そのような中、市教育委員会は、平成 29(2017)年、「発掘調査によらない非破壊調査で古墳の築造年代を探る」研究を行っている早稲

田大学文学部考古学コースの協力を得て、調査を実施することとなった。調査では、デジタル 3 次元測量で 187,617 点の座標を取得し、精密な測量図を作成した。また地中レーダー探査では、後円部墳頂に竪穴系の埋葬施設を確認した。このような調査結果から、前期の古墳としての特徴を備えているということが分かった。

この調査結果を基に、平成 30(2018)年、発掘調査によらない調査方法でどこまで古墳の真実に迫れるか開催したシンポジウムでは、築造時期が立体構造や設計原理からみて前期後半段階でも古い時期に想定できること、東海や関東各地で明らかになってきた事例と同様な、古墳時代前期における地域開発や大規模集落の形成、それらの統合、そしてその首長たる人物のモニュメントとして、東国でも有数な規模を誇る古墳が造営されたことなどが提示され、発掘調査を行ってなくても、この古墳の価値が十分に理解されることとなった。

将軍塚古墳が前期の古墳と確定したことにより、続く中期の大型帆立貝形古墳である雷電山古墳(84 m・大谷)など、古墳時代後期における埼玉古墳群の出現の背景に、比企地域の地域社会が想定できるようになった。『日本書紀』安閑天皇元年条に記載されている武蔵国造の乱との関連も考えられるようになった。古墳時代の北武蔵における比企地域の歴史的な位置づけがますます重要になってきた。

(注) 稲荷山古墳が修復前だったため、二子山古墳に次ぐ大きさであった。

発行：東松山市教育委員会
令和元年 12 月 1 日

